青少年社会教育実習
いのちの森「生き方と働き方学校」の
二年半の研修を学び終えて

「いのちの森 水輪」を卒業するにあたって

高橋　千広

発行：いのちの森「水輪」
長野市飯綱高原2471-2198
TEL 026-239-2630
URL http://www.suirin.com

X年の瀬も迫った十二月三十日、私は二年半の実習を終えて、「いのちの森水輪」を卒業し、実社会での自立に向けて旅立つことになりました。まさか自分が、長野県の山の中で、二年半も過ごすことになるなんて、かつての私には想像することも出来ませんでしたが、結果としてそれは、私の人生において、掛け替えのない大切な時間となりました。様々な紆余曲折を経て、今私は、ここに来ることができて本当によかったと、心から言うことができます。ここに、私の二年半を振り返らせていただきます。

まず始めに、私がここに来ることになった経緯から書かせていただきます。

私は大学で経営学を学んでいました が、特にやりたい仕事もなく、卒業が迫っても、まともに就職活動も出来ずにいました。企業の説明会に参加しても、自分が社会で働いていくということに、全く実感が持てず、履歴書の志望動機や自己アピールの欄をどうしても埋めることが出来ませんでした。結局1社も受けることもないまま、大学を卒業することになりました。今から考えると、幼い頃に父親を亡くしたことが一つの原因のような気がします。家庭の中に、社会の中心で働く存在がいなかったことで、働くことが私にとって、遠い未知の領域になってしまいました。そして、頑張って働いたところで、死ぬ時はあっさり死ぬのだといった虚しさが、心に広がっていたのだと思います。

大学は卒業したものの、働きもせず無気力に時間だけが過ぎていく日々が長く続きました。始めのうちは、ハローワークなどにも行ったりはしたのですが、本気で働こうという気持ちはなく、次第に就労活動自体行わなくなりました。生活は完全に昼夜逆転し、友人と会うこともなくなり、ほとんど誰とも口をきかなくなっていきました。何の希望もない、そんな生活が7年続いた時に、母が何かのきっかけでこの「生き方と働き方学校」を知り、私を連れて来てくれました。

初めて来た日のことは、今でもよく覚えています。「水輪」の塩澤みどり先生は初めて会う私にこう言いました。「あなたはここで絶対に良くなる」、「あなたはここに来ることが出来て本当にラッキー」。そのとき私は、その言葉を全く信じることが出来ませんでした。冗談は止めてくれと言いたい気分でした。でも結局、それはどちらも本当のことでした。

ここに来た当初の私は、精神的にも身体的にも最悪の状態でした。心は暗く虚ろで、体力はなく、何をするにも途轍もない疲労感を感じたことを覚えています。周りの人と打ち解けることもなく、ただ機械のように、体だけを動かしているような状態でした。ファームに配属されたのですが、長年昼夜逆転の生活を続けていたせいで、真夏の強烈な日差しに、腕が火傷のような状態になったこともありました。数ヶ月はそのようなつらい日々が続きましたが、つらくても続けているうちに、少しずつ、心も体も回復していきました。それは早寝早起き、一日三食の規則正しい生活、自然農園での力仕事、仲間との共同生活、それらの幾つかの要素が合わさって、良い状態へと向かわせてくれたのだと思います。このような、自宅での生活とは正反対の、健康的な生活スタイルが、失った自分を取り戻すためには、絶対に必要だったのだと今になって思います。

体力もつき、畑仕事にも慣れてくると、実習も楽しめるようになり、好循環が生まれてきます。責任の大きな役割も任せてもらえるようになり、やりがいも大きくなっていきます。仕事というものにもポジティブなイメージが持てるようになってきます。「生き方と働き方学校」では年齢も性別もキャリアも関係ありません。やる気と誠実ささえあれば、誰にでも重要な役割が与えられます。私は来て二ヶ月程経った頃に、野菜の在庫管理を担当させてもらえるようになり、四ヶ月経った頃には、野菜の全国発送や業者出荷のリーダーをやらせてもらえることになりました。この役割は卒業するまで続けさせてもらい、二年以上誰にも譲らなかったことは、私の小さな誇りでもあります。

畑での実習は私に沢山の学びを与えてくれました。第一に、継続することの大切さです。

野菜は一瞬一瞬変化しており、毎日注意深く関わらなくてはいけません。農薬、肥料を一切使用しない自然栽培は、その分手間がかかります。虫から守るためにネットを張り、伸び続ける雑草をこまめに刈らなければいけません。朝から晩まで、雨の日も風の日も、やることは山ほどあります。それを続けることは大変なことではありますが、確実に力になります。どんな状況でもやるべきことはやるという責任感、コンディションに左右されない忍耐力を養ってくれます。この経験は社会で働いていく上でも必ず役に立ってくれると思います。

そして水輪では「今に生きる」ということが常に大切にされています。「今に生きる」ということは、過去のことにとらわれたり、未来のことを心配するのではなく、とにかく目の前のことに集中し、一つ一つ乗り越えて行くということです。畑を耕す時は耕すことに集中し、淡々と体を動かす。それを意識的に続けていくことで、頭の中から雑念が消え、集中力が高まり、実習を早く正確に終わらせることが出来るようになってきます。

また、「今に生きる」ということは、自分に今与えられている環境を大切にするということでもあります。目の前にある自分の仕事を好きになり、一生懸命打ち込む。その今、今、今の繰り返しが未来を形作っていくのです。

また水輪で学んだなかで、社会で生きていく上で、非常に重要であると思えることが、時間に対する意識です。何時何分に現場に集合する、この実習を何分で終わらせる、それらを常に意識することで、行動にメリハリが生まれます。さらに、この仕事ならどのくらいの時間を設定すれば良いか、どうすれば時間内に終わらせることができるか、常に考え

裏面に続く←

ながら実習に取り組むことで、思考力も高まります。自宅で好き勝手な生活をしていた頃は、時間というものをほとんど意識していなかったために、思考も行動も相当鈍っていました。世の中は全て“時間”で動いており、仕事をしていく上での最も基礎的で重要な、時間感覚というものを、この二年半の間に学ばせていただいたと思っています。

そして、一つの目標に向かって皆で力を合わせることの大切さも学ばせていただきました。自分だけがいくら頑張っても、得られる結果には限界があります。途方もないと思えるような仕事も、全員の力を結集させれば、驚くような早さで終わってしまう、そんな経験を何度もしました。そしてそれは何にも代えがたい達成感と充実感を与えてくれるものでした。

私は野菜の出荷のリーダーをやらせていただいていましたが、何度かお客様からクレームを受けてしまったことがありました。そのほとんどは私自身が直接ミスしたものではなかったのですが、その度に仕事は一人でやるものではないと痛感させられました。他のメンバーが、正確に仕事ができるような指導をしているか、メンバーのミスをいかにカバーできるか、リーダーとして、自分の仕事以上に周りに気を配ることが出来ないと、良い結果は得られないということを、体験として学ばせていただきました。

そして、水輪での自習、生活を通して、私にとって何よりも大きな気付きとなったことが、他者と関わることの大切さ、喜びということです。二十四時間寝食を共にするということは、常に他者と向き合うということです。自分のやったことで誰かが喜んでくれる、それは無条件に嬉しいことです。心に暗い影が差し込んでも、誰かが話しかけてくれると、気が楽になります。つらいことがあっても、離れて暮らす家族のことを思うと、力が湧いてきます。人は一人では生きられない。それを心の底から感じることが出来たことは、私の水輪での生活において、最も大きな意味のある学びであったと感じています。

最後に、この「生き方と働き方学校」で勉強させていただいた、京セラ創業者である稲盛和夫さんの教えに触れさせていただきたいと思います。ここでは稲盛さんの著書である、「京セラフィロソフィ」、「生き方」、「働き方」の三冊を教材として使わせていただいています。

稲盛さんは、人間が生きる目的とは、魂を磨くこと、即ち、この世を去るときに、生まれたときよりも崇高な魂を持って旅立っていくことにあると説かれています。そして、魂を磨くために最も重要なことが、真面目に一生懸命、日々の仕事に打ち込むことだと仰っています。正しい考え方を持って、「ど」がつくほど真剣に一日一日を生きる。それを続けていくことが、心を高め、幸福な人生を歩むための唯一の方法なのです。稲盛さんの言葉には、この先の人生を生きていく上で、縁となる、大切な教えが沢山詰まっています。稲盛さんの考え方に触れさせていただいたこと、「いのちの森水輪」で、その実践の機会を与えていただいたことは、私にとって何よりの財産になったと思っています。

そしてそれは、思いがけず、記憶の中の父親との邂逅でもありました。毎日夜遅くまで働き、帰宅すると、寝ている私の様子を部屋まで見に来てくれた父。あちこちに出張に出かけ、たまの休みには色々なところへ家族を連れて行ってくれた父。ここで、生き方と働き方について学んでいるうちに、今までほとんど思い出すこともなかった、そんな幼い日の父親の記憶が蘇ってきました。父は、長いとは言えないその人生で、自らの魂を高め続け、旅立って行ったのではないか。全身全霊で、働くこと、生きることの意味を私に教えてくれたのではないか。そして今も、遠くから、静かに、私を光ある方へと、導こうとしてくれているのではないか。そう思えたとき、私の心の中にある虚しさは消え、今後の人生に対する希望が、少しずつ、しかし確実に、湧き上がってきました。そしてこれからは、自分自身が魂を磨き、働くこと、生きることに、心底向き合うときなのだと思います。そのような気付きを得られたことが、私が水輪に来たことの、本当の意味だったのではないかと感じています。

最後になりましたが、この二年半お世話になった方々へ、この場を借りて、感謝の気持ちを伝えさせていただきたいと思います。

「いのちの森クリニック」院長の巽先生は、会うたびに優しく声をかけて下さいました。常に皆のことを気にかけ、親身になって話を聞いて下さいました。

「いのちの森水輪」の塩澤研一先生は、ときに優しく、ときに厳しく私を指導して下さいました。研先生のその優しさと強さは、どこに行っても私の憧れです。外食に連れていっていただいたときに、「内緒な」と言って、ほんの少しだけお酒を勧めてくれたこと、本当に嬉しかったです。不器用な私には、その気持ちをうまく表すことはできませんでしたが、幼い頃、美味しそうにお酒を飲む父を見て、いつか一緒に飲みたいと思っていた私にとっては、本当に嬉しい時間だったのです。

「いのちの森水輪」の塩澤みどり先生は、最後まで私を導き続けて下さいました。私が正しくないことをしたときには、真剣に叱って下さり、私が落ち込んでいるときには、あの手この手を使って、私を元気づけて下さいました。みどり先生が最後に私にくれた「あなたは今旅の途中なのね」という言葉、ずっと胸に残っています。まだまだ未熟な私の行く末を案じながらも、最後は私の意志を尊重して、送り出してくれたみどり先生に、精一杯の感謝を送りたいと思います。みどり先生が、初めて会ったときにかけて下さった言葉は、本当のことでした。私はここで、一つ壁を乗り越えることができ、ここに来ることが出来て本当に良かったと、心の底から言うことが出来ます。

そして二年半共に学んできた仲間たちに。皆課題を抱えてはいるけれど、純粋で美しい魂を持った仲間たちに、この場を借りて、本当にありがとう、これからもお互い自分の魂を磨き続けようと、言わせていただきたいと思います。これからもそれぞれに、幾多の困難が訪れるでしょうが、仲間がいればきっと乗り越えられるはず。私も遠く離れていても、皆が頑張っていることを励みに、また胸を張って再会出来るよう、心の旅を続けたいと思います。

そしてもちろん、いつも遠くで見守ってくれていた家族に。

本当にありがとうございました。

いのちの森「生き方と働き方学校」

平成二十六年十二月三十日卒業

150101Y